違和感から共感まで

黒岩剛仁

今月は、「短歌往来」九月号のいくつかの文章に注目した。

笹公人による穂村弘著『短歌ください』の書評には、その冒頭から違和感を抱いてしまった。笹は、「短歌コンテストなどで、選者は、おのれの作風と似た投稿作品を好んで採る傾向がある」と言い、「これはもう永久不変の真理といってよいだろう」とまで述べる。そうだろうか。心ある選者ほど、また、自らに自信のある作家ほど、自分にない可能性を感じさせる作品を敢えて選んだりするのではないだろうか。朝日歌壇の佐佐木幸綱選歌欄が、また、馬場あき子選歌欄が、それぞれ選者と似た作風の歌で埋め尽くされたことなど、一度だってあっただろうか。「自身の作風とかけ離れた歌ばかり採る選者がいたとしたら、その歌人には作歌信条があるのかどうかを疑ったほうがいい」と記す笹よ、あなたの方こそ自らの視野の狭さを省みるべきなのではないか。

一方、プラスの方向で注目したのは、田中綾と都築直子の評論であった。

田中は、「さうさ。一生に二度とは帰つて来ないいのちの一秒だ。おれはその一秒がいとしい」という名高い台詞を含む、石川啄木の「一利己主義者と友人との対話」から説き起こす。

・曇りつつ木槿（むくげ）の花の落ちる道　疲れすぎると透明になる

吉川宏志『曳舟』

この歌を含む何首かを引いた上で、その「遠景には、社会全体の感情労働化という現実がある」と述べる。一九八〇年代にアメリカで、肉体労働、頭脳労働に加えて「感情労働」が話題とされるようになったそうだ。社会学者のA・R・ホックシールドという人が「感情社会学」なる新分野を切り拓き、特に女性の就労を巡る研究を展開したらしい。デルタ航空の客室乗務員たちを研究対象にしたというから、まさに現代のサービス業が抱える問題である。

・わたくしの代わりに生きるわたしです右手に見えてまいります
のは

斉藤斎藤『渡辺のわたし』

（前略）初句の「わたくし」を表層／深層演技をする前の素の自分とすると、その「わたくし」の代わりに、感情労働に従事する「わたし」が「右手に見えて」くる。「わたし」が感情労働を終えると、また「わたくし」にリセットされる、そのような心象という読みが可能である。

うーむ。田中説は分かったようで分からないのだが、「感情労働」という補助線を用いることで、中年の私なども含む、現代の職業詠の方向性が見えてくるかも知れない、と思った。

また、「日常のうた自然のうた」と題する特集中の都築の文章は面白かった。都築は、新聞読者からの投稿作をまとめた『阪神大震災を詠む』から作品を引き、短歌より俳句の方に詠み応えがあった、と述べる。「短歌は言いすぎている作が目立つ」と。

・避難所の寒さよ石となり眠る

神戸市　広岡善

この作に添えられた地名が「ロンドン」だったら、「神戸市」として読むときのようにはいいと感じないかも知れない、とも。長谷川櫂『震災歌集』に対する見解にも、そうだな、と感じた。